

保育における紙芝居上演の現状と課題

— 保育実習Ⅰ・Ⅱを終えた学生へのアンケートを手がかりに —

The Current State and Challenges of Kamishibai Performances in Childcare : A Survey of Students Who Completed Childcare Practicum I and II

藤井 伊津子*

Itsuko FUJII

Abstract

A questionnaire survey was conducted to explore the current status and challenges of performing kamishibai in childcare settings. The participants were 21 students who had completed a childcare practicum at daycare centers. The survey investigated how they perceived the use of kamishibai and picture books. Results revealed low awareness of kamishibai: although all students read picture books aloud during the practicum, only a small proportion (19%) performed kamishibai. However, some students expressed a genuine appreciation for kamishibai as an important cultural asset. These findings highlight the need for childcare educator training programs that enable students to learn about and recognize the unique characteristics of kamishibai through hands-on experience.

はじめに

1) 研究の動機・目的

紙芝居は日本で生まれた文化財であり、多くの人に親しまれてきた。保育においては戦後作成された我が国最初の幼児教育の手引き『保育要領』で紙芝居が取り上げられており¹、その後の幼稚園教育要領や保育所保育指針にも絵本と並ぶ保育教材として、1989年幼稚園教育要領、1990年保育所保育指針の改定まで取り上げられてきた²。

紙芝居は見る人の心をつなぎ説得力があるため^{3、4}、歴史の流れの中でいろいろな目的をもって演じられ、様々な内容の紙芝居が子どもたちに届けられた⁵。紙芝居の始まりは、1930年に日銭を稼ぐため飴などの販売を目的にそのおまけとして紙芝居を行っていた街頭紙芝居が始まりといわれている^{6、7}。目を輝かせて紙芝居に見入る子どもたちと出会う楽しさが紙芝居の演じ手にもあり、演じる者と見る者のお互いが紙芝居の楽しさに引きつけられてきた⁸。

筆者はお話ボランティアとして地域の幼稚園や保育園、こども園、小学校、学童保育に25年あまり関わってきた。子どもたちは紙芝居が大好きで、「紙芝居をして!」と催促されることが何度もあり、身をもって紙芝居の魅力と力を感じてきた。一方で保育現場で紙芝居があまり活用されていないこと、紙芝居に対する否定的な意見があることも感じてきた。

鬘・野崎は、保育現場における紙芝居の現状について次のように考察している。愛知県下の幼稚園・保育園のほとんどが紙芝居を保育に活用している。しかし、絵本との比較では絵本の方が活用頻度が高く、そのことが保有数や購入数、予算化の有無の違いに関係しているのではないかと。また、保育現場においては、保育者が紙芝居の特性を十分捉えた活用になっておらず、保育者に対して紙芝居の特性を認識したり、演じる・作る・遊ぶなどの活用方法のトレーニングをしたりする必要性があると⁹。浅井らは、紙芝居に対する保育士の学びと活用の関係について、紙芝居と絵本の違いの理解が重要な要因であると述べている¹⁰。

筆者が関わってきたお話ボランティア活動からは、ボランティア先の幼稚園・保育園等において保

* 作陽短期大学音楽学科幼児教育専攻 Sakuyo Junior College, Department of Music, Major of Childhood Education

育者が紙芝居を演じている姿はあまり見られなかった。保育学生たちのサークル活動をみても絵本への関心は強いが紙芝居への関心は弱かった。活用には地域や個々の園によって差がありそうだ。

本研究の動機は、紙芝居の楽しさを保育を通して子どもたちや保育者をはじめ、多くの人に届けたいという願いから取り組むものである。そして、保育を学んでいる学生が保育現場に出たとき紙芝居を子どもたちと共に楽しむ保育を実践してほしいと願う。そのため、紙芝居の活用が活発になるためにどのようなことを大切にしたり、取り組んだりしていけばよいのかを明らかにしたいと考える。その糸口として、保育学生が紙芝居についてどのような認識をもっていて、保育実習において活用したのか、実習を通して、保育現場における紙芝居の活用をどのように受け止めたのかを調査した。

本稿は紙芝居の歴史と特性について整理し、次に2025年度保育実習Ⅰ・Ⅱを履修した作陽短期大学（以下、本学とする）音楽学科幼児教育専攻学生のアンケート結果から、保育における紙芝居上演の現状と課題を探ることとする。

2) 研究の対象・方法

(1) 保育学生へのアンケートの目的

保育を学ぶ学生たちは紙芝居についてどのような知識や経験をもっているのか、そして、「保育実習Ⅰ・Ⅱ」（2025年7月1日～7月25日に実施）において、紙芝居についてどのような経験をしてきたかを調査することから、保育学生の紙芝居に対する認識を明らかにすると共に、保育現場での紙芝居の活用を把握し、保育現場における紙芝居上演のための課題を探ることを目的とする。

(2) 保育学生へのアンケートの対象と方法

対 象：2025年度の本学「保育実習Ⅰ・Ⅱ」を履修した21名 回収率 100%

アンケートの方法：実習反省会終了後に質問紙によるアンケート調査を実施

調 査 期 日：2025年7月28日（月）

調 査 内 容：① 学生の幼児期における紙芝居や絵本に対する認知と体験
② 保育実習Ⅰ・Ⅱにおける実習生としての紙芝居や絵本の保育実践の有無
③ 実習期間中における保育者の紙芝居や絵本の実践の有無
④ ①～③の回答の理由や感じたこと（自由記述）
⑤ 実習を終えてからの紙芝居についての考え（自由記述）

(3) アンケート実施に伴う倫理的配慮

質問紙によるアンケートを行うにあたり、対象学生に質問紙アンケートの目的を説明し、無記名でのアンケートであること、実施は本人の選択に委ねられ強制ではないこと、データは本研究以外には使用しないことを説明した。アンケートの回答は、筆者担当科目の評価には一切影響しないこと、提出をもって、アンケートへの承諾を得たことと理解する旨を口頭で伝えるとともに、質問紙にも記載した。

1. 紙芝居とは何か

1) 紙芝居の歴史

現在の紙芝居は平面的な紙に絵が描かれた「平絵」とよばれる形式のものである。そのルーツをたどると、日本には古くから「絵解き」や「のぞきからくり」という、絵と語りで物語が展開する独自の文化財があった。平絵の起源は江戸時代末期の「写し絵」に遡り、その後、明治30年代になって「立絵」がうまれた。立絵は紙に白い線や色で絵を描き、余白を黒く塗り竹串を差し込み、暗幕の前で演じるため、「紙芝居」とも呼ばれた。やがてより簡単で劇的な方法が求められ、1930（昭和5）年に現在の「平絵」の紙芝居が誕生した。^{11, 12} その頃の日本は世界恐慌の影響を受け、失業者が多くいた。その人たちが日銭を稼ぐため、自転車に飴や菓子などを入れた引き出し付きの紙芝居舞台と手描きの

紙芝居をもって子どもたちのいるところにてかけ、紙芝居を始めたことから街頭紙芝居と呼ばれた。街頭紙芝居はたちまち子どもたちの大人気となった。しかし、飴をなめながら紙芝居を見る状況や紙芝居の内容への批判もあった。そのようなことから、教育紙芝居、キリスト教紙芝居、幼稚園紙芝居が現れ教育的な内容を印刷した紙芝居へと変化していった。

また、そのころの日本ではアジアへの侵略戦争が拡大する中で、国家施策の宣伝や戦意高揚のため国策紙芝居として利用されていった。戦後、戦争による失業者がでたことから街頭紙芝居は再び復活した。一方教育紙芝居運動も熱心に行われ、『ぶたのいつつご』、『平和へのちかい』なども出版されていった。そして、『天人のはごろも』『おとうさん』などの優れた紙芝居が多く生まれた。1983年<まついのりこ>の『おおきく おおきく おおきくなあれ』をはじめとする観客参加型紙芝居が次々と生まれ、幼い観客も参加しながらお話を展開していくなかで紙芝居の楽しさはさらに広がっていった。現在では赤ちゃんから高齢者まで楽しむことができる、まついの言葉を借りるならば「本物」の文化としての紙芝居が多く出版されるようになった。そして日本から世界中へとひろがっている。¹³

紙芝居は時代や状況により様々な目的を強いられ活用されてきた。その中で紙芝居を愛する作家たちによって、子どものための文化財として優れた作品が多く出版されてきたことがうかがわれる。

2) 紙芝居の特性と魅力

紙芝居の特性と魅力について代表的な紙芝居作家や紙芝居実演家から整理する。

(1) 紙芝居の形式的特性

現在、紙芝居といわれているのは、平絵とよばれる形式のものである。平絵は平面的な紙の表（観客が見る画面）に絵が描かれ、裏側に演技手のためのセリフやト書、演技方（声の調子や心情、画面の抜き差し仕方）などが書かれており、紙芝居専用の舞台の中で演じる日本独自の文化財である。

セリフ中心の脚本のため、読み手（演技手）がそれぞれのセリフに込められた心情を十分に理解して演じることが求められる。また、1枚1枚の平絵の抜き方、間、により、見ている観客は芝居を観ているような楽しさを味わうことができる。^{14, 15}

堀尾青史（作家・紙芝居作家・宮沢賢治研究家：1914～1991）は紙芝居の創作、形式の特色について、絵本と紙芝居の違いを以下の表のようにまとめ、その違いは大きいと述べている。

表1 絵本と紙芝居の差異

絵 本	紙 芝 居
1 絵の芸術的表現	1 物語の芸術的表現
2 手にとって見る	2 距離をおいて演技手に見せてもらう
3 絵を読み取る（言葉はだいたい短く、絵が主体）	3 ドラマを楽しむ（物語と実演の層状）
4 納得してページをめくる	4 抜く技術を重視（視覚的な劇的展開法）
5 個人的理解	5 集団の共通理解

出典：堀尾青史「紙芝居のドラマツルギー」 子どもの文化研究会(2011)『紙芝居—子ども・文化・保育心を育てる理論と実際・実作の指導』P81より。縦書きを横書きにした。

また、堀尾は1982年11月1日発行の「紙しばい広場」創刊第1号に「しっかりやりましょう」というタイトルで、紙芝居を読み聞かせる際の表現力の向上や熱心さを次のように説いている。

紙芝居のよいところは、説得力のあることである。どうもそのへんのところをよく認識しない人が多い。・・・(筆者省略)・・・絵本を読み聞かせるのは、静かにていねいに文章を声にしなくてはならないが、紙芝居は喜怒哀楽を十分に表現しなくてはならぬし、主題を明確に認識させねばならない。ということは、演者が人生をよく知り、相当な表現力をもたないと

ダメということになる。従って若いときと経験をへてからの演出力はちがう。一つの作品が、人によって感銘のちがうのは、そんなことにもある。・・(筆者省略)・・紙芝居のように、絵をともなってわかりやすくできているものを、なんの風情もなくサッサと片づける人は、子どもの仕事から手をひいてもらいたい・・・・とは少し言いすぎかもしれないが、紙芝居は口下手の人をもしだいに訓練してゆくものだから、やる人はまず自分に対して熱心でなくてはならない。いいかげんだと子どもは敏感だからソッポをむく。一心にやれば、その効果ははかりしれない (下線は筆者)。幼児のとき見た紙芝居を今もおぼえているという母親たちをわたしは割合知っている (児童文学者・紙芝居研究会顧問)¹⁶。

(2) 紙芝居の魅力

まついのりこ (絵本作家・紙芝居作家：1934～2017) は、絵本と紙芝居を対比的に述べている。絵本は「本の中に読者が入っていき 自分という個の存在で作家の世界を自分自身のものにしていく そのよこびによって 個の感性が育まれていく」のに対し、紙芝居は「現実の空間に、作家の世界が出ていきひろがる中で 観客が共感によって作家の世界を 自分自身のものにしていく そのよこびによって 共感の感性ははぐくまれていく 個と共感というふたつの感性は、人間が、人間らしく生きていくために 車の両輪のように、大切で必要なもの。個の感性は共感の感性の中で解き放たれ、ひびきあい 共感の感性は個の感性の中で深められ 生きていくことのすばらしさが高められていく。子どもたちに絵本と紙芝居、ふたつの世界を！」¹⁷と述べている。

また、右手 (声優・紙芝居実演家：1927～2011) は、紙芝居には以下の4つの魅力があるという。

- ① なま身の人間どうし、感動を共にできる (機械音の一方通行ではなく、観客 (現在は主に子ども) の反応にすぐ対応でき、優しく言い換えたり、子どもの答えを誘い出したり、観客が理解しやすいように、語る速度などを、微妙に変化させながら、心をかよわせ合い、感動を共にすることができる)。
- ② 手作りの味のある文化財 (人工的な環境の中で、心をかよわせ合えるという、ハイテクの機器にはない手作り感を味わえるよさが、今、もとめられているのではないか)。
- ③ 紙芝居の特色・持ち味 (お芝居仕立てのため、会話が多いため、ドラマの世界を共に生き様々な感情を味わい育てることができる)。
- ④ 演じ手も育てる (紙芝居は演じてみることによってその楽しさが分かる。人間対人間がふれ合うのが紙芝居の世界であり、演じることによって演じ手も豊かな感情を培うことができる)¹⁸。

以上のように、紙芝居作家、実演家、および文学者、教育者等多くの人が紙芝居の魅力・力を認識し、子どもたちをはじめ多くの人に紙芝居を届けたいと願っている¹⁹。

紙芝居は絵本と同様に、言葉と絵と読み手の存在を必要とする。同じテーマのものを絵本で読んだり紙芝居で見たりすることも多い。作品に対する心情 (主人公等に対する思い等) も同じであろう。しかし個人的にまたは読んでくれる人と一緒に作品を楽しむ絵本と、演じ手 (読み手) と向き合い演じ手と共にまたその場にいる仲間と共に一緒に進めていく楽しさを味わうことのできる紙芝居には異なる文化があり、それぞれが大切といえる。まついが述べているように、車の両輪のように大切に育みたい感性であろう。特に紙芝居は「そこにいる他の人と一緒」といった人と繋がる力がある。心を一緒にして楽しむことが難しくなってきた現代にこそ紙芝居の力を知り、保育現場で活用されることが望まれると共に、守り伝えていくべき文化財であるといえる。

2. 保育学生への質問紙によるアンケート調査の結果と考察

1) 本学学生の幼児期における紙芝居と絵本に対する認知

幼児期に紙芝居や絵本にふれた経験の有無については、図1の通りであった。幼児期のことは記憶に薄いと考えられるが、それでも、紙芝居について80.9%の学生が見た経験があり、「楽しかつ

た」と回答した。絵本については、100%の学生が「見たことがある」、「楽しかった」と、回答した。
(図2)

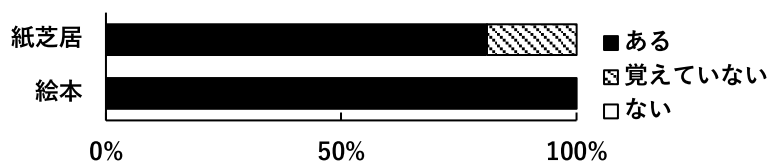


図1 幼児期に紙芝居・絵本にふれた経験

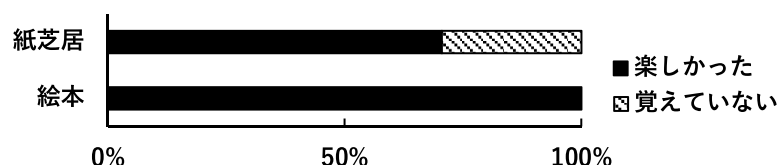


図2 幼児期の紙芝居・絵本の思い出

「楽しかった」理由を尋ねた結果が表2のとおりである。

表2 紙芝居・絵本の楽しかったと思う理由と魅力 (自由記述)

	紙芝居	絵本
楽しかったと思 出される理由	<ul style="list-style-type: none"> 絵が大きかったから。(2) 絵本より特別感があった。 絵しかないから。 めくる度に絵が見えてくるのが楽しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生が面白く読んでくれたから。 先生が声を変えて読んでくれる。 先生が読むのが上手だった。 絵本がおもしろかったから。 気に入った絵本を何度も読んでいた。 好きだったから。 物語がおもしろい。
魅力	<ul style="list-style-type: none"> 絵しなくて大きく、迫力がある。(7) 絵が大きいからみんなで楽しめる。 絵に集中できる。 集中できる。(3) 集中力が育つ。 文字がない。(3) 歴史を感じる。 想像力がつく。(3) 演技方で違う楽しみ方がある。 絵本よりアニメ感があってより物語に入りこみやすい。 イラストの大きさと見やすさがある。 みんなで共有でき、演じる人の工夫で幅が広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> しかけがあって夢中になれる絵本が多い(3)。 様々な種類がある(2)。 カラフルで見ていて飽きない。 手もとで見れる。 文字と絵の両方が見れるところ。 2つの場面が1度に見れるところ。 文字、絵、文の長さ。 新しいアイディア 閉まることで終わる感じ。「パタン」って終わるのがいい。 絵を楽しめる。気持ちを落ち着ける。想像力。 手軽でいつでも見ることができる。 物語に親しむことができる。 見たい、聞きたいと思わされる。 登場人物の感情に共感したり、初めて出会う言葉や表現にふれることができる。 1人でもみんなでも見れる。

紙芝居は、記述からも「文字がなく絵に集中でき、みんなで楽しめる」ことが大きな魅力であるといえる。対象の学生たちには実習前に筆者が授業「保育内容 (人間関係)」の中で、紙芝居『おかあ

さんのうた』²⁰と『はい！』²¹の2作を演じていたため、幼児期に紙芝居を見た経験の覚えがなかった学生もその後の体験や授業での体験を通して回答をしている。

絵本の思い出については絵本そのものの楽しさに加え、読んでもらった先生の存在、先生の読み聞かせの技術が絵本とともに思い出されている。また、絵本についての記述からは絵本の世界へ入っていき、自分の感性を刺激され存分にその世界を楽しんだのであろうことが推察される。

紙芝居の楽しさ、魅力には絵の大きいことが印象に強い。また絵に集中できること、他者と共有できることがあげられている。絵本の楽しさ、魅力からは、保育者の存在が大きいこと、仕掛けがあったり、種類が多いこと、手軽なこと等があげられた。紙芝居は他者との共感があげられたが、絵本では絵本の登場人物への共感があげられ、画面から出て広がる世界（紙芝居）と、入っていく世界（絵本）とのそれぞれの特性と魅力とが記述からうかがえる。

2) 実習中における紙芝居・絵本の保育実践経験

(1) 実習中における学生の紙芝居・絵本の保育実践の有無

保育実習Ⅰ・Ⅱの20日の期間に実習生として紙芝居を演じたり、絵本を読んだりした経験について尋ねた。(図3)紙芝居を活用した学生は、19%、絵本の読み聞かせをした学生は、100%であった。全員が絵本の読み聞かせを実習中に行っていた。紙芝居の認知度の低さがうかがわれる。

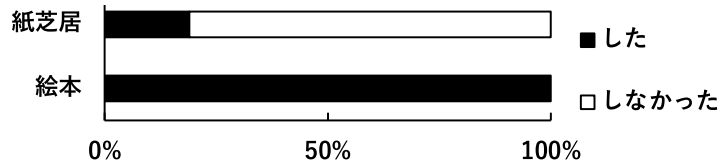


図3 保育実習中の実習生による紙芝居・絵本実施の有無

(2) 実習中に学生が紙芝居をしなかった理由

紙芝居を実習中に「しなかった」と回答した学生にその理由を選択式で求めた。(図4)

「思いつかなかった」、「保育者からするように言われなかった」ことが主な理由であったが、「実習先に見当たらなかった」、「なかった」ことが原因とも考えられる。

「その他」には3件の記入があり内容を見てみると、「0歳児なのであまりしようと思わなかった」、「絵本でこと足りると思った」、「絵本を読んだから」であった。紙芝居と絵本が見る子どもたちにとって、同じようなものという思いがうかがわれる。0歳児の絵本が近年多く出版されてきたように、紙芝居も近年「赤ちゃん紙芝居」が出版されているが、その情報が学生に届いていないと考えられる。また、「絵本でこと足りる」、「絵本を読んだから」という記述からは、紙芝居と絵本の特性が理解できていないことがうかがわれる。子どもの発達と文化財との関わりについて学び、多様な文化財の特性を活かした豊かな保育実践ができるよう、理論と実践を通し学ぶ機会が必要であると考えられる。

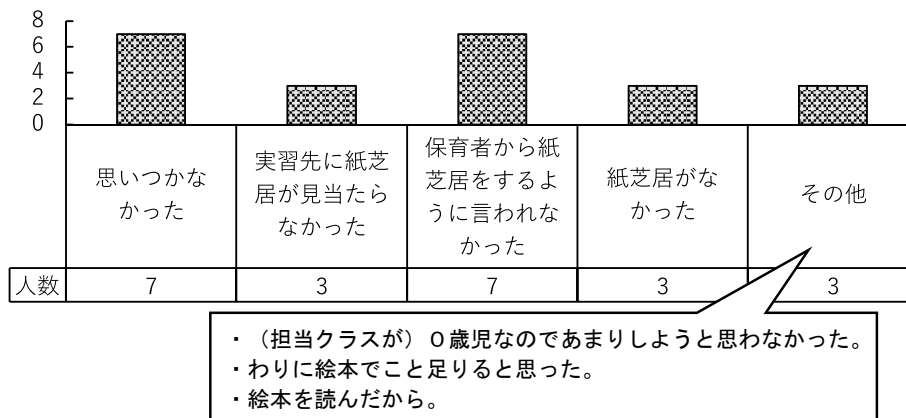


図4 実習生が紙芝居をしなかった理由

(3) 実習中に学生が実践した紙芝居・絵本から感じたこと考えたこと

学生に「紙芝居を子どもにした時の反応、感じたこと、考えたこと」「絵本を読み聞かせして感じたこと考えたこと」について尋ねた。その自由記述での回答を表3にまとめた。

紙芝居の特性・力としての、「集中」と「参加」があげられた。また、紙芝居上演にあたっては、内容に合わせて「抜き差し」の技も求められることがあげられた。

絵本については、紙芝居に比べ記入が多く関心の大きさがよく伝わってくる。

表3 学生が実習中に実践した紙芝居、絵本から感じたこと考えたこと

紙芝居	絵本
<ul style="list-style-type: none"> ・ 集中して紙芝居を見ている子どもが多かった。 ・ 集中して紙芝居を見ていた。 ・ 日頃から触れているアンパンマンの話だったので、子どもたちも最後まで楽しめたのではないかと考える。 ・ 積極的に参加していて楽しそうだった。 ・ 紙芝居を抜く瞬間が大切だと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集中して聞いてくれ、期待をもって歯みがきをしてくれた。 ・ 集中してみてくれた。絵本に興味を持ち、近づいてきた。 ・ 読み聞かせを聞くだけでなく、参加型で楽しんだ。 ・ 一緒に歌ったり、びっくりしてくれたりしたので、自分が楽しむことが大切だと思った。 ・ 「○○だ」これだれのことかな？という○○のパンツ！○○！と楽しそうだった。絵本の展開（いたそうとか）を知っているのでこうなるよ！とか言ってきたりする。 ・ 絵本が終わった時に「つながってるー？」と最後まで楽しんで絵本を見ていた。 ・ 読み終わった後に「だいじだいじだから」と言っているもはすぐに裸になるけど、ちゃんとかくしていて、少しは理解してくれたかなと思った（『だいじだいじどーこだ』）。 ・ 真似してくれたり、楽しそうにしてくれたりうれしかった。 ・ 1つ1つのページを見て楽しんでいる様子だった。 ・ 「いただきます」のページは食べに来てくれ、絵本の世界に入って楽しんでくれていた。 ・ 絵がかわいかったため、楽しそうだった。 ・ 絵本にさわったり、ページをめくりにきたりして楽しんでくれているように感じた。 ・ 全体に子どもたちに見えるように立ち位置や声の大きさなどに気をつけて読みました。難しかったです。 ・ 「これしってる」とか「見たことない」など反応していた。「絵本に出てくる登場人物を指しながら、自分も絵本の世界に入って楽しんでいるように感じた。 ・ きんぎょを見つけて指をさす姿が見られた（『きんぎょがにげた』2歳児）。 ・ 絵本に興味を持っていてかわいかった。

保育に絵本は大変身近で大切な保育教材となっているといえる。子どもも絵本にずいぶん親しんでいることが、子どもの会話からもうかがわれる。部分実習などで全員の学生が絵本の読み聞かせを体験していた。

少人数ではあったが、紙芝居を演じた体験も、大変貴重な体験になっている。集中してみる子どもの楽しそうな姿、一緒に参加している姿など、紙芝居の特性を感じているとともに、紙芝居を楽しむためには絵本とは異なる扱い方が求められることにも体験的に気づいている。

(4) 実習中に保育者が紙芝居・絵本を子どもたちに実践したかどうかの有無

実習中に保育者が紙芝居と絵本の実践をしたかどうかについて尋ねた。(図5)

実習期間中に紙芝居を「した」保育者は、28.6%、「しなかった」保育者は、71.4%であった。絵本の読み聞かせをしたかどうかについては、「した」100%、「しなかった」0%であった。

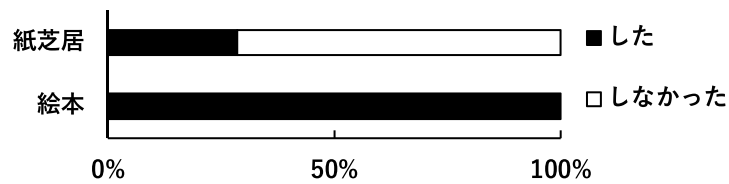


図5 保育実習中の保育者による紙芝居・絵本実施の有無

保育者が日常の保育の中で紙芝居を行うことは少なかった。しかし約29%の保育者は、「まとまった活動」や「お昼寝前」に紙芝居を行っていた。

絵本の読み聞かせについては、実習先のどこの園においてもどのクラスにおいても行われていて、絵本は保育において必須の文化財と捉えられているといえる。

(5) 実習中に保育者が子どもたちに紙芝居・絵本を実践する様子を見て感じたこと考えたこと

保育者が実習期間に行った紙芝居、絵本の実践の様子を学生がその場において感じたこと考えたことについて表4にまとめた。

紙芝居について学生は、観客の対象となる子どもに合致する内容を選ぶことの大切さや演じる工夫が求められることを感じ、紙芝居が楽しいもので「自分もしてみたい」と考えている。このことから学生や保育者が実際に紙芝居にふれること、楽しさを感じることを学ぶことの必要性があるといえる。

絵本については記入が多く、機会が多かったことが分かる。学生は子どもの様子、保育者の気くばり、読み聞かせの方法など、多くの気づきと学びを得ていた。絵本に対する関心の深さ、考察の深さがうかがわれる。

表4 保育者が実習期間に行った紙芝居、絵本の実践から感じたこと考えたこと

紙芝居	絵本
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分もしてみたい。 ・ 面白い。 ・ 絵本よりおちついて見ている。 ・ 登場人物によって声のトーンを変えたり、スピードを変えたりして子どもたちが楽しめるようにしている。 ・ 絵本と違い文章が長いので、最後まで楽しめるようにする工夫が必要だと感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの視線を集めて活動に進みやすくしていたと感じた。 ・ 声のトーンや子どもの反応を見ながら読み聞かせを行っていた。 ・ よくようをつけていて、すごいなと感じた。→興味を持つような読み方。 ・ 子どもがおちついて見れる環境作りがよかった。声かけがすてき。 ・ 読み方の工夫が大切だと感じた。子どもの言葉にどれだけ反応するか。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何度も同じ本を読むことで、子どもの頭に残りやすいし、だんだん理解できてくる。 ・ 子どもの言葉に反応しながら読んでいた。 ・ 言葉やリズムを覚えるので、同じ絵本を 3、4 種類かえていた。 ・ 子どもたちの言葉に反応しつつ絵本を読み進めていた。 ・ みんな集中して聞いていて、よくようをつけたりして読んでいたから、「もう一回読んで」などと子どもたちが何回も読んでもらっていて楽しそうだった。 ・ ページをめくるテンポや声色を変える読み、楽しさを感じられるようにしていた。 ・ 季節を感じる本や、歌を取り入れた本を読まれていて子どもの好きなものを取り入れられていた。 ・ 声の大きさ、スピードの工夫、年齢に合わせて変える。 ・ 子どもの言葉に言葉を返しながらかかれていて、コミュニケーションを楽しんでいた。 ・ よく読んでいる絵本やたべ物の絵本は、反応が良い。 ・ 絵本の持ち方など意識して読んでいた。 ・ 子どもの発達段階に合った絵本を読んでいて。発達が遅い子に合った絵本を読んでみんなが楽しめるようにしていた。 ・ 絵本の位置を子どもたちが見やすいように高く上げていた。 ・ 文章は読まずに歌などを歌っていた。
--	---

(6) 子どもに紙芝居をすることについて (自由記述から)

保育実習を終えて、学生が紙芝居についてどのようなことを感じたり考えたりしているのかを尋ねた。その記述内容を表5にまとめた。

表5 保育実習を終えて紙芝居について感じたこと考えたこと

<ul style="list-style-type: none"> ・ 読むことに集中せず、子どもに問いかけるように話したりといろいろな工夫が必要だと思う。 ・ 声の大きさやしやべり方も意識して読みました。 ・ 紙芝居は絵本より長いから集中できる子とできない子がいたかな？ ・ 3歳児には、帰りの会の時に子どもに選んでもらって紙芝居を読んでいる。 ・ 紙芝居は読む言葉のスピードや表現や子どもは絵を見ただけで感じるため、絵が大事になってくると思う。 ・ 絵本とはまたちがう面白さを感じられると思う。 ・ 子どもに広めたい。 ・ 紙芝居も大切だと思う。
--

紙芝居は実際に見なければその魅力は理解しにくく、学生の体験が大変少ないことから紙芝居に対する意見が出てこなかったようである。少数ではあるが実際に紙芝居を実践したことにより、文化財

としての紙芝居の楽しさや価値を理解し、「子どもに広めたい」、「紙芝居も大切だと思う」という意見が出てきたと考えられる。

「教育紙芝居の創始者」とも呼ばれる高橋五山は、紙芝居を演じるにあたって「上からいくな、下からいくな、対等にいけ」²²といていたという。右手は、「人間対人間」がふれ合うのが紙芝居の世界です。作品をよく読んで素直に演じてください。登場人物の心の動きが、演じ手の中に眠っていた感情を呼び起こすかもしれません。このように紙芝居は子どもにも、大人にも、豊かな感情を培う文化財なのです²³と述べている。

保育学生も保育者も、優れた紙芝居に出会い、楽しみ、そして子どもたちに伝えたいと思うこと、謙虚に作品のなかの登場人物たちの気持ちにより添い、演じていく経験をすること、そのことが学生や保育者を紙芝居の演じ手として育てていくことになると考えられる。

おわりに

本研究にあたりまず、紙芝居とは何かを歴史、形式、特性の視点から整理した。紙芝居は絵本と同じように絵と言葉からなるが、伝え方、楽しみ方に大きな違いもある。紙芝居は集団を対象に作られ、そのメッセージ性が強いいため、演じる立場の人、時代により負のイメージも強いが、紙芝居の真の特性を知りその魅力に惹かれ、子どもの成長を願う作家や演者ら、そして、紙芝居を楽しむ子どもたちによって守り育てられてきた。

絵本と紙芝居を保育現場にと考えるとき、その量、魅力についての認知度が大きく違う。また、形式の違いからくる実践の手間の違い、下読みや練習の必要性など、比較してみると絵本の方が手軽に用いやすい。

保育実習中における紙芝居に対する学生の対応や振り返りを見ると、紙芝居に対する認知の低さを知るとともに、「紙芝居をやってみたい」「子どもにとって大切な文化財」だと感じていることも明らかになった。実習期間に保育者が紙芝居を上演する状況に立ち会った学生は30%弱であったが、実際にその場に身をおき子どもの反応を知ったこと、共に楽しんだことは紙芝居への意識を大きく変えていた。

また、実習中に紙芝居を上演した学生の割合が19%であったことに比べれば保育者の割合は29%と高く、紙芝居は保育現場でこれから広がっていくのではないかと考える。学生はその場にいたことから学内で学ぶことのできなかつた子どもの姿からも紙芝居の力を学んだこともうかがえる。

子どもたちと保育学生や保育者が紙芝居を楽しむためには、本人自身が紙芝居を見たり、楽しむ子どもの様子を見たり、自分も演じその楽しさを味わうことが必要だと考えられる。また、浅井らが指摘するように紙芝居と絵本の違いを学ぶことも必要²⁴であろう。

今後、保育学生たちが学生時代に紙芝居の特性を体験しながら学び、絵本と紙芝居とが車の両輪のように大切な文化財であることを認識し、子どもを中心にその子どもを取り巻く人たちと一緒に紙芝居を楽しむことができるように、その実践力を身につけていくための対策を検討していきたい。

また、岡山県下の保育者の紙芝居に対する認識と実践を調査し、岡山県の保育現場における紙芝居の現状と課題を探り、紙芝居の楽しさが広がっていくための方策を検討していきたい。

引用・参考文献

- 1 鬢櫛久美子・種市淳子（2006）「保育のなかの紙芝居 ―倉橋惣三と「紙芝居」の関わり―」名古屋柳城短期大学研究紀要第28号 95-105
- 2 佐々木由美子（2023）「保育における紙芝居の動向 ―1945年以降を中心に―」『東京未来大学研究紀要』Vol16 53-64
- 3 まついのりこ（1998）『紙芝居 共感のよろこび』童心社
- 4 堀尾青史（1982）「紙芝居広場第1号」『紙芝居20年の歩み―紙芝居広場・総集編』（2001）子どもの文化研究所・紙芝居

- 5 佐々木由美子 (2017)「日本教育紙芝居協会「保育紙芝居」がめざしたもの」『東京未来大学研究紀要』Vol 11 87-96
- 6 溝手恵里「第6章 紙芝居」田中卓也・藤井伊津子・橋爪けい子・小島千恵子(編)(2015)『明日の保育・教育にいかす 子ども文化』溪水社 70-83
- 7 酒井京子・日下部茂子(2003)『紙芝居を演じる』図書館流通センター 26-29
- 8 前掲書1
- 9 鬢櫛久美子・野崎真琴(2010)「保育現場における紙芝居の活用状況」『名古屋柳城短期大学研究紀要第32号』名古屋柳城短期大学 65-75
- 10 浅井拓久也・浅井かおり(2018)「紙芝居に対する保育士の学びと活用の関係に関する研究—どのような学びが紙芝居の活用につながるか—」『未来の保育と教育—東京未来大学保育・教育センター紀要—第5号 1-8
- 11 前掲書6
- 12 全甲社 高橋五山と紙芝居—紙芝居の世界へようこそ (<https://zenkosha.com/>) 2025/8/24 取得
- 13 紙芝居文化の会『紙芝居百科』童心社 138-152
- 14 森上史郎・柏女霊峰(2015)『保育用語辞典第8版』ミネルヴァ書房 385
- 15 秋田喜代美 監修、東京大学教育学研究科附属発達保育実践政策センター(2019)『保育学用語辞典』中央法規 117・294
- 16 前掲書4
- 17 前掲書3 24
- 18 右手和子(2011)子どもと文化研究所編「1. 紙芝居の魅力って? 演じ手と紙芝居」『紙芝居—子ども・文化・保育 心を育てる理論と実践・実作の指導』一斉社 4-8
- 19 同上「紙芝居をめぐる先人たちの珠玉の言葉」193-197
- 20 渡辺享子/脚本・絵(1999)『おかあさんのうた』童心社
- 21 間所ひさこ/脚本 山本祐司/絵(2006)『はーい』童心社
- 22 前掲書12
- 23 前掲書18 8
- 24 前掲書10

